

研究ノート

## 現代語による法要式の試みについての考察

堀田 泰寛

### 一、はじめに

現代の日本社会は、既存の価値観が大きく変化し、個々人と家族間の関係、生活様式も一変しつつある。このような社会構造の変化に際し、日本の仏教教団の多くは、伝統的な宗教的儀礼（以下、法要式）を執り行う上で、新しい技術、新しい生活スタイルとの間に生じるギャップに直面している。

例えば、従来畳や板の間の上で行うことを前提としてきた法要式も、現在では椅子とテーブルを用いた法要式を執り行う場合が多くなっている。しかし、現在の宗定法要式には、椅子とテーブルを前提とした儀礼は制定されておらず、その所作はその現場、各寺院、各地域の判断にゆだねられているのが現状である。

また、法要の内容についても、参列者からは「わからない」「退屈である」という意見が度々上がっている。これらの意見に対し、法要の内容を日常的に用いられる文章（以下、現代語）で伝えようとする試みが各方面でなされている。この研究では、法要の現代語化の試みについて、その現状と背景を、事例を交えながら分析する。

## 二、問題の所在

現在に至るまで伝統的な仏教教団の法要式では、原則として各宗派の定めた法要式に則り、漢文、もしくは漢文書き下し文（以下、訓読）による読経、文語体による読み上げが行われてきた。しかし、戦後は、漢文および訓読、文語体が日常の場で用いられること、目に触れることがほとんどなく、その内容を檀信徒や参列者が理解することが困難となっている。そのような中で法要式の内容が「わからない」「退屈である」のような意見は、決して少なくないのが現状である。例えば、以下のような意見がある。

「聞いて意味不明の漢文読経のままでもいいのか」

キリスト教の葬儀に参列し「意味が分かる言葉」を死者に捧げられることを体験すると、何度聞いても意味がわからないお経に対して、強烈な違和感が沸き上がるのです。お葬式の時は、死の衝撃がありますから、まだ気になりませんが、一周忌や三回忌、七回忌の時などに聞くお経は意味不明で、その時間は、足のしびれと共に、我慢する時間になっていると、僕には感じられます。お坊さんの中にはお経が終わったあとの法話でいろいろ伝えようとしてくれる人がいます。けれど「聖なる言葉」は厳かな「聖なる時間」の中で語られるから意味があるのです。私たちの心にしみ入るのです。「受け入れ難い死を受け入れる」という精神の苦行は「聖なる時間」に行われるものなのです。というか、その時間にしか、できないものでしょう。

（鴻上尚史『月刊住職』（仏教界に期待すること） 二〇一九年三月号）

この意見に対しては、多くの示唆が含まれている。法要の内容が理解できないことの本質的な問題は何か。それは、

故人や遺族と、法要を取り仕切る僧侶との間で、厳かな「聖なる時間」が共有されないことにある。僧侶が儀式を行っている間、参列者はその儀式的意義や、説かれている教義の内容についてではなく、「足の痛み」や、「焼香の順番」について思いを巡らしている、というのである。

参列者と儀礼を行う聖職者との間で「聖なる時間」の「共有」を行うための方策の一つとして、法要式の中で経文や要句の内容を、参列者に理解してもらうことが必要であるのではないかという視点が浮かび上がる。そのためには、読経の内容を法要の中で、全てではないにしても、日常的に使う言葉を用いて遺族に伝えるという試みに至る。

一方で、読経の内容を法要で意味が分かるように伝えるためには、読み上げる「読経」そのものを書き換える、手を加えるということが必要となる。しかし、仏教伝来以来、連続と続けられてきた「読経」そのものに変更を加えることは大変な責任、および、その宗派の歴史性、独自性から、信仰上の重大な問題をはらんでいることも否めない。各宗派の僧侶からも、現状に対し理解を示しつつ、現代語化が困難である理由として、以下のような意見がある。

■曹洞宗 大乘寺住職 東隆眞

各宗、各派の儀式の作法、經典ないし順序などは、その宗派の宗儀と地域の長い歴史および独自性によりそれぞれ形成されて、今日に及んでいる。（中略）一寺院が、独断的にこれと大幅に相違することは許されないだろうが、現状のままでもいいかという、少なくとも私は首をかしげている。

■真言宗豊山派 密蔵院住職 名取芳彦

意味が多少わかるくらいがいいのであって、さらに和訳しては（中略）読経ではなく朗読である。（中略）せっかくのお経も軽く聞こえてしまうだろう。

『月刊住職』「聞いて意味のわからない読経問題（二）」二〇一九年八月号

■浄土宗本願寺派 如来寺住職 釈徹宗

以前、ある牧師さんが「今は現代語訳の『聖書』が使われているが、個人的には昔の文語体『聖書』の方が胸に迫るものがあつた」と話していた。（中略）つまりわかりやすい言葉に変更することで、意味性は向上するものの、逆に儀礼性は低下する場合があるということだ。

おそらく、漢訳經典の読誦には「音楽性や儀礼性の發揮」という面がある。

『月刊住職』「聞いて意味のわからない読経問題（二）」二〇一九年九月号

これらの問題に対し、積極的に「經典」を意識し、あえて儀礼性が失われても、法要を日常で用いられる用語に置き換えて行くべきであるという意見も存在する。

■日蓮宗 日本寺住職 清瀬日草

信仰表現の一つに読経があります。漢字で書かれた経文を漢音ではなく呉音で棒読みするだけです。本来書物を読む、經典を読む目的は意味内容を学び知るためです。しかし現今の読経はこの目的は皆無であります。ただ読経の為の読経です。これでは呪文ではありませんか。法華経を呪文化して読むことは教主釈尊への冒瀆になりませんか。

（『檀林二〇号』二〇一六年八月一日発行）

## ■戸次公正

いまだに日本仏教は、日本語訳のすべての「お経」をもっていないのである。なぜ、そうなのか？これは、儀式化され、江戸時代の檀家制度で習俗化されてきた日本の仏教が、漢文経典を誦する儀式のみを荘重なものとして保守し固執しつづけてきたからである。（中略）それどころか、日本語化して朗読すれば聞いてわかることを「仏教の通俗化」として非難し避けているくらいすらある。日本語で読むことに対しては「ありがたみがなくなる」「日本語にする」と漢文の深い意味が伝わらない……」などという主張をまことしやかにする人が今日なおいる。このままではもはや仏教ではなく「迷信でしかなくなる」。

（『日本語で読むお経を作った僧侶の物語』二〇一九年発行）

これらの意見を総合すると、法要式の現代語化の試みを宗派の運動として一般化するには、現在では様々な問題があり、また困難が伴うのが現状であると感じる。一方、法要に参加する檀信徒、遺族、参列者との「聖なる時間」の共有のために、現代語による法要を行うという試みもまた、必要であると考えられる。

そこで、一つの提言として、現在受け継がれてきた伝統的な法要を主軸としながらも、選択肢として、参列者の希望や意見に合わせて、選択的に現代語による法要を試みるということを提言する。また、将来的に、法要式を現代語化の要請があった場合、その求めに応じることができるよう、様々な事例を収集し、資料を準備しておくことも大切であろうと考える。

次の章では、これらの諸所の背景を勘案しながら、法要式の大部分を現代語化して執り行っている、千葉県由緒寺院日本寺貫首清瀬日草の法要の実践の試みを取り上げる。

## 三、実践の試み

由緒寺院日本寺貫首清瀬日章による現代語による法要

法要開始前に、すべての参列者に『法華経読誦要集（口語訳付）』を配布する。

※法要式の各章の句頭のみ導師独唱、次の句、節よりすべて参加者と共に読み上げる。

句頭の番号は、各章の原文に対応する。

### (一)、道場観（御題目三唱ののち、原文を読み上げる）

- ① 当に知るべし、是の処は即ち是れ道場なり。
- ② 諸佛此に於て阿耨多羅三藐三菩提を得、
- ③ 諸佛此に於て法輪を転じ、
- ④ 諸佛此に於て般涅槃したもう。

次に、それぞれの行に対応した現代語訳をお唱えする。

① 私たちは唯今、南無妙法蓮華経とお唱えしました。この時、この場所がお題目の道場、人生の心の道場となつたのです。

② このお題目の道場に於いて、全ての仏様がお悟りを開かれています。

③ 同時に、ここで仏様は教えを説かれています。

④ つまり、私たちがお題目を信じ唱えているこの娑婆世界こそ、全ての仏様の安住の地なのです。

(二)、読経

『法華経読誦要集』の該当する現代語訳部分のみを読み上げる。木魚等の法具による拍子は打たない。金鉢は適宜打つ。

妙法蓮華経方便品第二

① ついに釈尊はご自身の悟りの内容を、ありのままに説き明かすには、どうしたら良いかを、深く深く考えられた後、心静かに目を開けられて、弟子の中で知恵第一と言われた舍利弗に向かって話し始められました。

② 私ばかりでなく仏の知恵というものは、あなた方には想像もできないほど、深く広いものです。

③ あなた方には仏の悟りを、そのまま説いても解らないので、最初はあなた方の心に従って方便の教えを説いてから、本心を明かそうとしました。ところがあなた方は、その方便の真意すらわからないのですから、真実の世界にも入れません。

妙法蓮華経如来寿量品第十六（前述と同様）

(三)、祖訓

必要に応じて、別ページの日蓮聖人の御言葉、もしくは別冊『日蓮聖人の御言葉』の現代語訳を読み上げる。

(四)、唱題

経本を手元に置き、合掌し、御題目をお唱えする。

※太鼓等の法具により拍子を打つ。

## (五)、回向

現代語で参列者と共に読み上げる。読み上げたのち、霊位の読み上げ等、法要の趣旨に応じて導師が付け加えて回向を行う。回向の説明も行う。

① ただ今、お題目を唱え、法華経を読誦できましたことを、法華経の三宝に感謝し、その功德を、御恩を受けてきた全ての方々に感謝し、また亡き人々へ捧げます。

② 謹んで円満にして完全なる、歴史上かつて表されたことのないマンダラ御本尊の前で、題目を唱え、法華経読誦させて頂きました。(以下略)

## (六)、帰依

回向と同様に読み上げる。

① 正しい信仰生活のために

② どうかお題目の祈りを通じて、生きとして生けるすべてのものへの慈しみの心をいつも忘れず、皆さまと御一緒に、正しき人の道を歩んでまいりましょう。

③ 生涯にわたって、ただ今いただいた、お題目の御縁を、大切に育てていくことをお誓いいたします。

南無妙法蓮華経(三唱)

以上

※適宜、法要の時間や内容によって讃嘆や誓言を加える。



## 四、考察

上記の法要の特徴は、お経本の右側に訓読文、左側に口語訳文が述べられていることにある。原文には触れられるようにしつつ、その原文の意味が分かるようになっていっている。

そして、この経本の日本語訳の最大の特徴は、その内容が参列者に語りかける形が強調されていることである。経典の内容を「参列者と共有」することを目的として、口語化し、法要を組み立てているのである。

一方で、この法要では、木魚などの法要具で拍子を打つことがないので、一緒に読み進めていて、多くの場所で音が揃わない、バラバラになる、リズムがとれないという問題が生じている。このため、葬送儀礼の厳かさや、一体感、音楽性という点では、従来の真読による読経の方が統一性を得られると感じる。実際、多数の参列者（五十名以上）になると、拍子がないことにより全体の読経がずれ込み、調和性が失われてしまう場面があった。

さらに法要の現代語化に際し、大きな問題が生じる。それは、「経典に手を加える」ことが避けられないということである。

鳩摩羅什が漢訳した「妙法蓮華経」に手を加え、法要に用いるということは、これまでの先師たちは決して踏み込まなかった「タブー」であった。なぜなら、信仰の根拠であり、帰依の対象でもある「経典」に変更を加えるということ許せば、その信仰の希薄化、ひいては独自解釈の乱立、宗教的統一性の崩壊につながるのではないかという恐れが惹起されるのである。これは今回紹介した、清瀬日草も大いに感じているところであり、その責任と、重大さを勘案して、あくまで一僧侶として、自身の教えに理解のある檀信徒を対象として法要を執り行っている。

しかし、それでもあえてこの現代語による法要を執り行っている理由は、「従来の法要式では檀信徒や参列者との間に、日蓮宗の教義を抛り所とした「信仰」を共有できていないのではないか」という強い危機感があるためである。

## 五、結論と将来の展望

もし読経の意味が解らなくともその儀式が荘厳なものとして受け容れられるのであれば、その法要は經典を用いず、その場の雰囲気即した言葉や音楽で、形式的に執り行われても良いのであって、現に最近の葬儀場ではこれまで仏式で行われていた葬儀を、お別れ会として宗教色を排し、故人が生前に好きだった音楽をかけながら告別するという形式も取られている。

しかしそこには、宗教的な教義もなければ、信仰もない。死に対する説明もなく、これから取り残された遺族はどうしたらよいか、という視点もない。死者を悼み、死と向きあい、そして克服していくという、死を乗り越えるための儀礼としても甚だ不十分なのである。

対して、従来の伝統的な法要式には、その回答が十分に盛り込まれている。問題は、その内容が参列する対象にとって理解が難しい、あるいは共感するには表現が古すぎることにある。

以上の観点を総括すると、今後は何らかの形で、宗教儀式の受け手側の変化に応じ、少なからずその形に変更や修正が加えられてゆくことは避けられないのではないだろうか。その選択肢の一つとして、現代語による法要式を行うことも検討されていくだろう。しかし、早急な現代語化の試みは多くの問題が生じると予想される。現在の伝統的な法要式に則りつつも参列者との間に「聖なる時間」を共有できる方式を模索することも重要であろう。

結論として、法要式の現代語化の試みと従来の法要式を継続してゆく試みは決して対立するものではなく、お互いが様々な試行錯誤と建設的な批判を繰り返しながら、新たな法要式として高度な水準へと止揚されるべき関係であると考えられる。

現在の法要式に対し、その伝統性を否定することなく、同時に法要式の未来の在り方を検証してゆく試みもまた否

定することなく、議論していくことが求められるであろう。

【参考文献】

- 久松彰彦、(二〇一六)「葬送儀礼の現代における変容」、東京大学宗教学年報第三十三号  
角岡賢一、(二〇一〇)「仏教思想普及のための言語学的試み」、龍谷大学国際センター研究年報第十九号  
丸山劫外、(二〇一九) 新宗教の経典に学ぶ、曹洞宗中央研究センター 第二十一回学術大会  
清瀬日草、(二〇一六)「檀林二〇号」、正東山 日本寺  
清瀬日草、(二〇一六)『法華経読誦要集(口語訳付)』、正東山 日本寺  
戸次公正、(二〇一九)『日本語で読むお経を作った僧侶の物語』、明石書店  
『月刊住職』二〇一九年三月号 鴻上尚史、「仏教界に期待すること」、興山舎  
『月刊住職』二〇一九年八月号「聞いて意味のわからない読経問題(一)」、興山舎  
『月刊住職』二〇一九年九月号「聞いて意味のわからない読経問題(二)」、興山舎